

問題 1. 下線 1 について、著者が「よいしょ問題」に関心を持ち、それについて調べることにした理由を 170 字から 200 字で述べてください。

著者は、社会言語学の研究者から、看護現場では「よいしょ」という言葉が他の場面に比べて非常に高い頻度で用いられているということを知り、著者自身の経験に照らし合わせてもそのように思われたことから関心を持った。さらに、「よいしょ」というかけ声自体が何を意味するのかわからずに使っているというところに面白さを感じ、この言葉がどんな動作、どんなタイミングで使われているのかを調べることにした。(191 字)

問題 2. 下線 2 について、「よいしょ」をどのように使うことで、「他人とやりとりするための道具」となるのでしょうか。本文の内容を踏まえて 450 字から 500 字で述べてください。

「よいしょ」はものを持ち上げる動作の時によく使われるかけ声であるが、一人で持ち上げるときと複数人で持ち上げるときでは使われ方が違っている。複数人で持ち上げるときは「せーの」などのイントロ的なかけ声と合わせることで、他の人と動作のタイミングを合わせるために使われる。さらに、「よいしょ」という音韻に含まれる<s>や<sh>の音を活用して、チームの中でお互いの動作を同期させている。<s>や<sh>の音は<k>や<t>や<p>といった他の子音と違って長さを調節することができるという特徴を持つ。この特徴を使って、相手の様子を見ながら<s><sh>の長さを調節して、相手が動作を合わせられる準備が整ったと見たところでかけ声を進めることができる。複数人でもものを持ち上げようとしたとき、「よいしょ」の「よい」で腰を沈めた後、同じタイミングで持ち上げ動作に移るために「しょ」の<sh>の長さを調整することで相手とタイミングを合わせたり、語気の強さを変えることによって相手に力を入れるよう促したりしている。このように、協働作業において相手とコミュニケーションを取って作業をうまく進めるために使うことで、「よいしょ」は他人とやりとりするための道具となる。(494 字)